

sukhāvati vyūhaḥ ||
やすいというまわしあえぎわそのもの
としてはいませるきわの すなわち いくさだたり一身

namaḥ sarva-jñāya ||
さだめわりそのことが、
誰もかれもらのあからいこれなるにたるきわにともおさせる御方
のためとこそはいよかし！

evam mayā śrutam | ekasmin samaye
bhagavān śrāvastyāṃ viharati sma |
かくとて、私自身によりてでもつかまつろうばかりとてはありもうさねばならなかった
ところが、これまた、おぼせ聞こえていることがらにこそなければなりません。
かしこくもそのとき、ひるみむちこそが、きこえほまれのもりに於て、また、みゆき
あそばすのであった。

jeta-vane śnātha-piṇḍa-dasyārāme mahatā
bhikṣu-saṃghena sārḍham |
たいらげのみこによる野あそびに於ては、すなわち、あてど無けるたびのみちづれども
らのまかせあずかりなるにたりませるおんきみご一身のならまほしけれともありけるばか
りにはあったところの、これ、おおにえのうたげそのことに於てでもかたじけのうわたら
さねばならぬばかりにはあったところでもありましたが、大いたりけらしとはおわせるき
わの、これまた、こころする者らというはらからご自身によられましてでも、それ、あい
なめにまかりあらりょうばかりとこそおさせられたのでなければならぬ。

ardha-trayodaśabhir bhikṣu-śatair abhi=
jñātābhijñātaiḥ sthavirair mahā-śrāv=
akaiḥ sarvair arhadbhiḥ | tad yathā
sthavireṇa ca śāri-putreṇa |

また、もろもろの、一つかたなりけらし者らが十三ともたるべくはおらんきわにともい
るおおみものごとども、すなわち、もろもろの、みさおなれるかたがたが百どもなりけり
とはあったところとてもあるおおみことがらどもによりては、これまた、もろもろの、啓
らきさとられてある者らのさとし表われているひとたち一身らによりても、これ、かたじ
けのうくだしおかせんほどにとはわたらせたまうのもであったが、また、重やけりけらし
とはおらんものごとどものことにもいまいしょうところの、もろもろの、大きなほまれ名
がたによりてでは、もろもろの、なにもかもども、すなわち、もろもろの、みそなわせる
かたがたご一身らによりてもまかりおかせんほどにとはあそぼせるのもであった。

しかり、重らけらまほしとはおろうおおみことがらとしてもわたらせんきわのではある
けれども、これまた、みことのりがわがこなりけらしとはおわさん御方によりてでもかた
じけのうおかれんばかりにあらせられまいしょうところではあることにもなる。

mahā-maudgalyāyanena ca mahā-kāśyapena
ca mahā-kapṣhinena ca

また、これ、大いたる同じ莢の仲という繰りきたりみご自身によりてであずかりあそぼ
るわけではあるけれども。すなわち、大きなゆくとし亀ご一身によりてこそ・これ
また、大いたるやどり痰ご自身によりて・ではあるけれどもである。

mahā-kātyāyanena ca mahā-kausthīlena
ca revatena ca

また、大きないか許りかという繰りよぎりすじご一身によりて、これ、あずかりおわ
しませるわけではあるけれども。すなわち、大いたる腹のうちご自身こそによりて・こ
れまた、あだすがたご一身によりて・ではあるけれどもである。

śuddhi-panthakena ca nandena cānandena
ca

また、これ、きよらいぎわというさしわたりみご自身によりてであずかりあらるるわけ
ではあるけれども。すなわち、愛でやぎみご一身によりてこそ・これまた、愛であえみ
ご自身によりて・ではあるけれどもである。

rāhulena ca gavāṃ patinā ca bhara-
vājena ca

また、知れぬまご一身によりて、これ、あずかりあそばせるわけではあるけれども。すなわち、もろもろの、うつわたち自身のなるべかれとはいましようところの、まかなえあえりご一身によりてこそ・ これまた、荷ないつつある足ばやご自身によりて・ ではあるけれどもである。

kālo dayinā ca vakkulena cāniruddhena
ca |

また、めぐりどきという出でわたりみご一身によりて、これ、あずかりおわしませるわけではあるけれども。すなわち、酔いごちご自身こそによりて・ これまた、ひそやがずにいませる御方によりて・ ではあるけれどもである。

ḡetaiś cānyaiś ca sambahulair mahā-
śrāvakaiḥ sambahulaiś ca bodhi-sattvair
mahā-sattvaiḥ | tad yathā mañju-śriyā
ca kumāra-bhūtena |

それはともかく、また、そのほかにとはこれまかりおらんほどにもおるであろうきわの
ではあるけれども、もろもろの、こめまぎらわしけりけらしとはおろうおおみものごとど
も、すなわち、もろもろの、大きなきこえ名がたご一身らによりても、これまた、こみ
まぎらわしけらまほしとはおろうおおみことがらどものことにもあられるであろうはずの
ではあるけれども、また、もろもろの、ことだまがみことなりけらしとはあそばれん御方
がた、すなわち、もろもろの、大いたるまこと（ミコト）がたご自身によりてでもおわし
ましようところではあった。

しかり、みやびけるかね承かりみご一身としてもかたじけのうせんほどにとあらせたま
うきわのではあるけれども、いとけなさがながらえ立ちてはあそばせる御方によりてまか
りおかせられますきわにとおわたしたのでもあることにはなる。

ajitena ca bodhi-sattvena gandha-has-
tinā ca bodhi-sattvena

これまた、おしなびずにいる者のことにもあられますはずのではあるけれども、たましいというみことご自身によりてでは、においというゆるび象ごち一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、また、これ、ひとだまがまこと(ミコト)なりけらしとはおわさん御方によりてであらせられますところでもあった。

nityodyuktena ca bodhi-sattvenānikṣip-
ta-dhurena ca bodhi-sattvena |

すなわち、つねなびたりけらしものごとどもがうち利きあえてはいることがらのことにもおかれるはずのではあるけれども、たまのおというみことご自身によりてでは、これまた、重みどころのあだ決まらずにいるひと一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、これ、ことだまがまこと(ミコト)なりけらしとはおわさん御方によりてであらせられますところでもあった。

etaiś cānyaiś ca sambahulair bodhi-
sattvair mahā-sattvaiḥ |

それはともかく、また、これ、そのほかとはまかりありけるばかりともあらねばならなかったところのではあるけれども、こめまじらわしけりけらしとはおろうきわにともおらん者たち、すなわち、もろもろの、たましいというみことがたご自身によりてでは、これまた、もろもろの、大きなまこと(ミコト)がたご一身らによりてあそばせたまうばかりにとこそおわたしたのでなければならぬ。

śakreṇa ca devānām indreṇa brahmaṇā
ca sahaṃ-patinā |

また、すべしらせごころご自身のこととてもあらねばならぬところではあるけれども、すなわち、もろもろの、こころねたち一身らのたるべくこれわたらしょうきわとなればならぬばかりの、おぼえごころご自身によりてでは、これまた、こころもとご一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、また、ゆるげしまかないあえりご自身こそによりてではおわしましたところでもなければならぬ。

etaiś cānyaiś ca sambahulair deva-

putra-nayuta-śata-sahasraih

||1||

それはともかく、すなわち、そのほかにとはこれつこうまつらんほどにもいるばかりの
ではあるけれども、これまた、こみまじらわしかりけらしとはあらんものごとどもにより
てでも、また、こころねどもというよつぎらの結びつづまりてはいるわけでもない百とも
が千どもたらまほしとはおろうことがらどもによりてこれおかせられましようきわにとも
あらせたまうた。 <—>

tatra khalu bhagavān āyusmantam śāri-
putram āmantrayati sma |

かたや、そのつど、ひるめむちにおかせられましては、ことぶけるかた、すなわち、み
たましろがあとめなりけらしともあそばれん御方に相いて、おんのりごちこれたまわすの
であった。

asti śāri-putra paścime dig-bhāge ito
buddha-kṣetram koṭi-śata-sahasraṃ bu-
ddha-kṣetrāṇām atikramya sukhāvati
nāma loka-dhātuḥ |

「みことのりがわがこたる方よ、のちざまならまほしけれとはまかりあろうばかりの、
まむきどどもというわりまえみ一身に於て、これまた、いとなみている者が、また、
まほろばのおぼせはえているわざごと、すなわち、もろもろの、よせかたまりめと
いう百ともが千どもたらまほしともおろう者に取りて・もろもろの、おぼほゆるかた
がたというくにはらそのことどものなるべきはずと・こそではありますが、これまた、
はねまかれるや、また、やすらぎというあえまわりぎわ、すなわち、いみなそのこと
のことでもあるところの、ちりのよというあやま自身が、これまた、有るのであり
ます。

tatrāmitāyur nāma tathāgato Śrhan
samyak-sambuddha etarhi tiṣṭhati dhr-
iyate yāpayati dharmam ca deśayati |

そのつど、ことぶきのとりはからわずにいるわざごとそのこととしてはかたじけのうわたらせんほどにともおわしませるが、また、うきなそのことのこととはまかりおかれんばかりともあらましようところの、すめらぎご一身、すなわち、みそなわせつつはいませるばかりの、これまた、まめやけくみこころゆかせらるかたも、やはり、立てなおりあそばされ、負いゆだねられたまい、まわりあわさしめくだしおかせられ、また、ことわりそのことをしてではありまするけれども、すなわち、あえ向きゆかしめたまわすのであります。

tat kim manyase śāri-putra kena
kāraṇena sā loka-dhātuḥ sukhāvātīty
ucyate |

さようなものごとが、これまた、何ごとにと、あずかり観えたまわれるや。みたましろがよつぎたる方よ。誰としてはおらねばならなかつたきわの、たて成りによりてか、さようなよのちりがすじならざるべからざりける場も、また、『ゆるやいというまわしあえぎわそのものことであるところではなければならぬ。』とて、ことわかれるのでありましようや。

tatra khalu punaḥ śāri-putra sukhāva=
tyām loka-dhātu nāsti sattvānām kāya-
duḥkham na citta-duḥkham apramāṇāny
eva sukha-kāraṇāni |

ところで、こなた、そのつど、みことのりがあとめたる方よ、ゆるやぎというあえまわりぎわそのものとしてはおったばかりともいるきわの、すなわち、うきよというきめ自身に於て、これまた、もろもろの、みことたち一身らのならまほしと、また、身すじがうきめたりけらしものごとが、無いのであります。すなわち、つりごころどもといううきごとのことではなく、これまた、いまだ見あからまぬことどもそのこととしてでもおらねばならぬにはほかならぬはずでもあるのが、また、もろもろの、やすらいによるたて成しそのことどもになければなりません。

tena kāraṇena sā loka-dhātuḥ

すなわち、さようなたて成りのことにあらざるべからざりけることがらによりてではあらねばなりませぬが、これまた、『さようなちりのよがあやまならざるべからざりける延も、また、やすらぎというまわしあえぎわそのものとしておろうはずでなければならぬ。』とて、ことわけられはするのでもあります。」 <=>

punar aparaṃ śāri-putra sukhāvātī
loka-dhātuḥ saptabhir vedikābhiḥ
saptabhis tāla-paṅktibhiḥ kiṅkiṇī-
jālais ca samalamkṛtā

「ところが、さらに、みたましろがわがこたる方よ、すなわち、やすらいというあえまわりぎわそのものが、これ、よのちりというすじ自身のこととてはあらねばならなかつたところでもありますが、これまた、七つどもそのこととしてではおろうはずともおらんばかりの、また、おりふれしめうるにたるままならまほしとはあろう砌のことでもあるところの、七つそのことども、すなわち、もろもろの、ならび指の樹という五つぎおくりぎわどもそのものによりてでは、これまた、もろもろの、伝えまくりぎわという網しろどもそのことによりてでもまかりあらんばかりとではありまするけれども、また、整のいているきわにおるのでなければなりませぬ。

samanta-to Snuparikṣiptā citrā darśa-
nīyā caturṇām ratnānām | tad yathā
su-varṇasya rūpyasya vaidūryasya
sphaṭi-kasya |

すなわち、身のきわの上からは、これまた、汲みわたりているきわにとおらん場としてもおらねばならぬきわの、つやでそのものが、見つめられるべかれとはあろうばかりにもおるではありましようが、また、もろもろの、四つともそのこと、すなわち、もろもろの、ほどこりどもそのことのたらまほしとつこうまつろうばかりにおるはずでなければなりませぬ。しかり、高やからまほしすがた一身のたりけらしともおるが、わびつ型そのことのならまほしとはおり、これまた、石ころそのことのたりしとも

おるが、珠のままなりとてはある者 のたりけりともおったことにはなるはずであり
ます。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-
kṣetram || 3 ||

かくにとこそ、もろもろの、かたちづきそのことどもによりても、また、みことの
りがよつぎなる方よ、もろもろの、おぼえはせられてあるまほろばがさがむきみたり
けらしいくさだてりたち自身によりては、すなわち、整のわれてあるところとても
まかりあらねばならなかつたばかりとはあるところが、さようなおぼほせるかたとい
うくにはらのことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりませぬ。」

⟨三⟩

punar aparam śāri-putra sukhāvat [ī]
loka - dhātau sapta - ratna - mayyaḥ
puṣkarīṇyaḥ tad yathā suvarṇasya
rūpyasya vaidūryasya sphaṭikasya
lohitaṃ muktasyāśmagarbhasya musāra-
galvasya saptamasya ratnasya |

「ところで、さらに、みたましろがあとめなる方よ、これまた、ゆるやぎという
まわしあえぎわそのものも、また、うきよというきめ一身に於ては、すなわち、七つ
どもによるほどこどもの練りあがり これなるにたるべくもおらねばならぬきわの、
これまた、うるいぎわそのものの方からあずかりおろうはずでこそなければなりませ
ぬ。しかり、金たりけらしことがらのなりけりとはあつたはずでもあるが、また、銀
たらまほし者のなるべかれとはあつたばかりでもあり、瑠璃たりけらしものごとのな
りきとはあろうはずであるが、すなわち、水晶たらまほしことがらのなりとてもあり、
珊瑚たりけらし者のなるべかれとはうろうはずであるが、これまた、馬腦たらまほし
ものごとのなるべからんともあり、琥珀たりけらしことがらのなるべきとはあるであ
ろうはずでもあるが、また、七つぎめそのこと、すなわち、ほどこりそのことのたる
べけんともおろうばかりにはいることにもなります。

aṣṭāṅgopeta - vāri - paripūrṇāḥ sama-
tīrtha-kāḥ kāka-peyā su-varṇa-vālukā-
samstrtāḥ |

これまた、八つともというわりふりみどものそい援けておる水むきすじがあて充まりてはいるきわならまほしともあろうばかりにして、ひとしたりけらし者らがわたりすじなるべきままたらまほしとはおったばかりともあり、よせり鳥ごこちらにより用い飲まれざるをえぬところにはつこうまつらんばかりとてもあり、また、高やからまほしものごとどもがかたちたるべき砂はまどもが陳べかえりてはいるきわならまほしとまかりあろうばかりにもなければありませぬ。

tāsu ca puṣkarīṇīṣu samantāc catur-
diśam catvāri sopānāni citrāṇi
darśanīyāni caturṇām ratnānām tad
yathā su-varṇasya rūpyasya vaidūry-
asya sphaṭi-kasya |

すなわち、さような、もろもろの、うるいぎわとしておらざるべからざりける延どもに於てではありまするけれども、これまた、身のはた自身こその方からは、四つどもというむかいどそのものに相いても、また、もろもろの、四つどもそのこと、すなわち、もろもろの、なかばのあたひそのことどものことにはあろうはずの、もろもろの、つやめきどもそのことどもも、これまた、見つめらるべからんとあるわけであり、また、四つそのことども、すなわち、もろもろの、ほどこしどもそのことのとたりしとはおろうはずにもなければありませぬ。しかり、高らかりけらしいろあい一身のたるべしとはおるが、さびつ色そのこととなりとてもあり、これまた、石くれそのことのとたりしとはおるが、玉のままなりとてもあることがらのたりけりとはおったことにもなるはずであります。

tāsām ca puṣkarīṇīnām samantād ratna-
vrkṣā jātāś citrā darśanīyāḥ saptānām
ratnānām tad yathā suvarṇasya rūpy-
asya vaidūryasya sphaṭikasya lohita-

muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya
saptamasya ratnasya |

また、さような、もろもろの、うるいぎわとしておらざるべからざりける砌どものならまほしとこそではありますけれども、すなわち、身のふち自身の方からは、これまた、もろもろの、ほどこりというもとすじたち一身らも、また、生まれつきにいるきわにとはおるのでもあります。すなわち、つやねそのものが、これまた、見つめらるべかれとあるわけですが、また、七つともそのこと、すなわち、もろもろの、ほどこりともそのことのたらまほしとはおろうばかりにもなければありませぬ。しかり、金なりけらし者のたるべきはずとはおるであろうが、これまた、銀ならまほしものごとのたるべけんともおり、瑠璃なりけらしことからのたるべくはおろうはずでもあるが、また、水晶ならまほし者のたるにとはおろうばかりにもあり、珊瑚なりけらしものごとのたりけれとはおったはずであるが、すなわち、馬腦ならまほしことからのたりしともおり、これまた、琥珀なりけらし者のたりけりとはおったはずでもあるが、また、七つぎめそのこと、すなわち、ほどこりそのこととなりけりとはあったことにもなります。

tāsu ca puṣkarīṇīṣu santi padmāni
jātāni nīlāni nīla-varṇāni nīla-
nirbhāsāni nīla-nidarśanāni | pītāni
pīta-varṇāni pīta-nirbhāsāni pīta-
nidarśanāni | lohītāni lohita-varṇāni
lohita-nirbhāsāni lohita-nidarśanāni |
avadātāni avadāta-varṇāni avadāta-
nirbhāsāni avadāta-nidarśanāni | citr-
āni citr [ā] - varṇāni citra-nirbhāsāni
citr [ā] - nidarśanāni śakaṭa - cakra-
pramāṇa - pariṇāhāni |

これまた、さような、もろもろの、うるいぎわのことにあらざるべからざりける場どもにこそ於てではありますけれども、もろもろの、あられ蓮そのことどもが、生まれつかれてあるものごとどもに取りて、また、有るのであります。

すなわち、もろもろの、青たりけらしことがらどもは、青色がいろめなりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、もろもろの、青たらまほし者らがしるしなりけらしものごとどもに相いても、また、もろもろの、青色による徴しだてどもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

もろもろの、黄たりけらしことがらどもは、すなわち、黄色がすがたなりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、もろもろの、黄たらまほし者らがしめしなりけらしものごとどもに取りても、また、もろもろの、黄色による示しあえそのことどものことにこそあろうはずでなければなりませぬ。

すなわち、もろもろの、赤たりけらしことがらどもは、赤色がかたちなりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、もろもろの、赤たらまほし者らがしるしなりけらしものごとどもに相いても、また、もろもろの、赤色による徴しだてどもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

もろもろの、とり敢えていることがらどもは、すなわち、しな色がいろあいたりけらしともおらねばならなかつたばかりにはいるが、これまた、もろもろの、敢えとられてある者らがしめしなりけらしものごとどもに取りても、また、もろもろの、がら色による示しあえそのことどものことにこそあろうはずでなければなりませぬ。

すなわち、もろもろの、いろ鮮やけらしことがらどもは、いろめきがいろめなりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、もろもろの、いろ濃けらまほし者らがしるしなりけらしものごとどもに相いても、また、もろもろの、つやめによる徴しだてどもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

すなわち、車のうてなというあきつみいくさによる見あからみが身はばたるべけれどとはつこうまつらんほどにともいるきわにこそなければありませぬ。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-
kṣetram ||4||

かくとて、もろもろの、いろめづきそのことどもによりては、みことのりがわがこなる方よ、これまた、もろもろの、おぼせはやらされておるまほろばがさがむきすじたりけらしいくさだたりたち自身によりてでも、また、整のわされておるきわにとはまかりおらねばならなかつたばかりにもいるのが、さようなおぼはゆるかたがたとい

うくにはらのことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりません。」

〈四〉

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-
kṣetre nitya-pravāditāni divyāni
tūryāni | su-varṇa-varṇā ca mahā-
prthivī ramaṇiyā |

「ところが、さらに、みたましろがよつぎなる方よ、そのつど、まほろばがおほえはやされてあるわざごとそのことに於てでは、つねなみたらまほし者どもが宣べとおりてもいるきわにはおらねばならぬものごとども、すなわち、もろもろの、さやけさそのことどもが、もろもろの、あえひびきどもそのことに取りてつこうまつらんばかりとてあるところではなければなりません。これまた、高らかるすがたがかたちたりけりともおったばかりのではありませんるけれども、また、大いからまほしけるうぶすなそのものが、すなわち、残しおさえらるばかりとはまかりあろうほどにもおりましたらうが。

tatra ca buddha-kṣetre triṣkrtvo
rātrau triṣkrtvo divasasya puṣpa-
varṣaṃ pravarsati divyānām mādāra-
va-puṣpānām |

これまた、そのつどではありまするけれども、おほはせるかたというくにはらそのことに於ては、三たびにわたり。また、よさりぎわそのものに於ても、三たびにわたり。すなわち、まひるご一身のたるべしとはおらんきわの、はなやぎというあめゆきそのことが、露むすぶのであります。これまた、さやけからまほしけれともあろうばかりの、もろもろの、どよめきうとし花々 [マーンダーラヴァ] というはなめきそのことどものたりけらしとはつこうまつらんほどにもおるではありますらうが。

tatra ye sattvā upapannās te ekena
puro bhaktena koṭi-śata-sahasraṃ
buddhānām vandanti anyāṃ loka-

dhātūn gatvā |

そのつど、およそ、もろもろの、まこと(ミコト)らとしておらざるべからざりけむ者たちも、また、たすけ憑りもうしてはいるきわにともおりましようが、彼ら自身は、すなわち、一つながらそのことによりて、これまた、かねてより・また、宛てわかりていることがらによりて、すなわち、こりかたまりどという百ともが千どもなりけらしともあらん者に相い・これまた、もろもろの、おぼせはえているおおみものごどもものたるべく、たたえそやしなりもうすのであります。これ、そのほかとてはまかりあつたばかりともあろうところの、また、もろもろの、ちりのよというあやまたち一身らに取り、通しゆきてこそであるわけですが。

ekaikaṃ ca tathāgataṃ koṭi - śata-
sahasrābhiḥ puṣpa - vr̥ṣṭibhir abhy-
avakīrya punar api tām eva loka-
dhātum āgacchanti divā vihārāya |

すなわち、一つに一つとこそではありまするけれども、これまた、すめらみことご自身に相いて、また、よせかためりめという百ともが千なりけりとはあつたところの、もろもろの、はなやぎというさしうるいぎわどもそのものによりて、そそぎつぎもうしあげたるのち、ことさらに、さよふな、まさしく、延そのもの、すなわち、よのちりというすじご一身らに取りてこそ、これまた、あえ来たるのであります。また、ひるま、これ、すずりみご自身のおんためとてもつこうまつらんばかりとはあらんところでもあります。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-
kṣetram ||5||

かくにとこそ、もろもろの、かたちづけそのことどもによりては、みことのりがあつめたる方よ、すなわち、もろもろの、おほほゆるかたがたというまほろばがさがむけみなりけらしいくさだてりたち一身らによりても、これまた、整のえられてあるところとてはまかりあらねばならなかつたばかりともあるところが、さよふなくにはらがおぼえはせられてあるわざごとのことにあらざるべからざりけることがらであつ

たところでなければなりません。」

◇五◇

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-
kṣetre santi haṃsāḥ krauñcā mayūrās
ca |

「ところで、さらに、みたましろがわがこたる方よ、また、そのつど、おぼほせるかたというまほろぼそのことに於てでは、もろもろの、わたり雁ごちたち自身が、すなわち、もろもろの、はなれ鶴ごちたち一身らとして、これまた、有るのであります。また、もろもろの、かむさび鳥ごちたち自身のことでもあったところではありまするけれども。

te triṣṅtvo rātrau triṣṅtvo div-
asasya saṃnipatya saṃgītiṃ kurvanti
sma kha-ka-kha-kāni ca rutāni pravāh-
aranti | teṣāṃ pravāharatām indriya-
bala-bodhy-aṅga-śabdo niścarati |

さような者たち一身らは、すなわち、三たび。これまた、よさりぎわそのものに於ても、また、三たび。すなわち、これ、まひるご自身のなるべかれとてつこうまつらんばかりに、よせ現わるや、すずろぎまわりそのものに相い、成したちなりもうすのではありましたが、これまた、隙のままたりける者らが暇なりしままとてもあろうおおみものごとどもに取りてではありまするけれども、また、もろもろの、鳴きわたりているおおみことがらどもがこそ、すなわち、わたしとよめきもうすのであり、さような者たち一身らのたるべけんと、これまた、とよみわたらされてある砌に相い、また、ここちむきどもがいきおいなりけらしひとだまどもがわりつきたるべきことば自身が、ゆき演びこれなるのであります。

tatra teṣāṃ manuṣyāṇāṃ taṃ śabdāṃ
śrutvā buddha-manasikāra utpadyate
dharma-manasikāra utpadyate saṃgha-

manasikāra utpadyate |

そのつど、さような、もろもろの、ひとがらどもとしておらざるべからざりける
おおみものごとどものなるべからんとて、すなわち、さようなことのはのことにおわ
さざるべからざりける御方に取り、おぼせ聞こえなりもうしてや、これまた、こころ
ばせのおぼせはやらされておるひと一身が、また、えあらたがり出れるのであります。
すなわち、わりがらどもがこころぎわたりけらし御方にあつては、これまた、あらた
ぎ出られこそおかれますわけであり、また、はらからというこころばやり自身として
でも、すなわち、えあらたげ出れば、これ、わたらしょうはずでもあります。

tat kiṃ manyase śāri-putra tiryag-
yonī-gatās te sattvāḥ na punar evaṃ
draṣṭavyam |

さようなことがらを、これまた、何ごとにとて、観あずかられおかるや。みこと
のりがよつぎなる方よ。いきものどもが孕みぎわたりし者らの通しゆきているきわに
とはおらねばならぬばかりにもおらんのが、また、さような、もろもろの、みことら
のことにあらざるべからざりける者たちでなければなりません。さりながら、かく
とてつこうまつらんほどにはおらねばならなかったのも、すなわち、見つめられね
ばならぬものごとでなければなりません。

tat kasmād dhetoh nāmāpi śāri-putra
tatra buddha-kṣetre nirayāṇām nāsti
tiryag-yonīnām yama-lokasya nāsti |

さようなことがらそのことが、誰としてはおらんきわの、あてよりみの方からこれ
おるのもありましようや。これまた、いみなそのことがであるわけでこそはあつて
も、みたましろがあとめなる方よ、そのつど、おぼはゆるかたがたというくにはら
そのことに於ては、もろもろの、めしとらわれたちのたらまほしかれと、居りもせず、
また、もろもろの、けのものという孕まりみたち自身のなるべきはずとて、すなわち、
生き死にといううきよ自身のたらまほしかれと、存りようがないのであります。

te punaḥ pakṣi-saṃghās tenāmitāyusā

tathāgatena nirmitā dharmā - śabdā
niścārayanti |

ところが、さような、もろもろの、わきぞえ 〈翼さながら〉 ならまほしけるともがらのことにあらざるべからざりける者たちは、さようなよわいがさしはからわれずにあるわざごととしておらざるべからざりけるおおみものごとのことにもあられたまうところの、すべらきご一身によりては、これまた、さしわたりているきわにともあり、ことむきということば自身をして、また、演びゆかしめるのであります。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtam tad buddha-
kṣetram || 6 ||

かくにとこそ、もろもろの、いろめづけどもそのことによりてでは、みことのりがわがこたる方よ、すなわち、もろもろの、おぼえはやされてあるまほろばがさがむけすじなりけらしいくさだたりたち一身らによりても、これまた、整のいておるきわにとはまかりおらねばならんほどにもいるのが、さようなおぼはせるかたというくにはらとしておらざるべからざりけることがらになければなりませぬ。」

〈六〉

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-
kṣetre tāsāṃ ca tāla-paṅktīnāṃ teṣāṃ
ca kiṅkiṇī-jālānāṃ vāteritānāṃ valgur
mano-jaḥ śabdo niścārayati |

「ところで、さらに、みたましろがよつぎたる方よ、また、そのつど、すなわち、まほろばのおぼせはえているわざごとそのことに於ては、これまた、さような、もろもろの、かぞえ指の樹どもという五つぎましぎわどものことにあらざるべからざりける場どもとしてもおらねばならなかつたきわのではありませんるけれども、さような、もろもろの、まくし次ぎぎわという網のめどものことにあらざるべからざりける者たちのなりけりとあつたところではなければならぬばかりのではありませんるけれども、また、もろもろの、あおりはげみてるものごとどものあおぎあがりているわざごとどもそのことのたらまほしとこそ、すなわち、たえにたうとはこれつこうまつらんほど

にもいるが、これまた、こころがけどもの生まれつくにたるべくはおらんきわにと
もいるではあろうばかりの、ことのは自身が、また、ゆき演べこれあるのであります。

tad yathāpi nāma śāri-putra koṭi-śata-
sahasrāṅgi-kasya divyasya tūryasya
cāryaiḥ sampravāditasya valgur mano-
jah śabdo niścarati |

しかり、のみならず、みたましろがあとめなる方よ、こりかためりどが百ともたり
ける千どもがつけわりなりきままたるにともおらんきわにはこれおりましたばかり
の、すなわち、さやけさそのことのならまほしともあらねばならぬところとはある
が、これまた、さしとよみそのことのたらまほしとおるのでなければならぬはずの、
また、もろもろの、なりゆきそのことどもによりて、すなわち、ひびきのこらしめら
れてあるおおみことがらのなるべからんとこそ、これ、たえにたゆとてまかりあつた
ばかりともあるが、これまた、こころえが生まれつくにたるべくはおらんきわの、こ
とば一身も、また、ゆき演びなりもうしはすることにもなります。

evam eva śāri-putra tāsām ca tāla-
pañktīnām teṣām ca kiñkiṇī-jālānām
vāteritānām valgur mano-jah śabdo
niścarati |

かくとてあつたにはほかならぬところでもあります、みたましろがわがこたる方
よ、すなわち、さような、もろもろの、ならび指の樹という五つぎおくりぎわとして
おらざるべからざりける廷どものことにはあらねばならなかつたはずでもあるところ
のではありますけれども、これまた、さような、もろもろの、伝えまくりぎわとい
う網しろどもとしておらざるべからざりける者たちのなりけりとあつたところではな
ければならぬはずではありますけれども、また、もろもろの、はげみあおられて
あるものごとどもがあがりあおがれてあるわざごとどもそのことのたらまほしとこそ、
すなわち、たえにたうとはこれつこうまつらんほどにもいるではあろうが、これま
た、こころもちどもの生まれつくにたるべくもおらんきわの、ことのは自身が、また、
ゆき演べありもうすのであります。

tatra teṣāṃ manuṣyāṇāṃ taṃ śabdāṃ
śrutvā buddhānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭh-
ati dharmānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhati
saṃghānusmṛtiḥ kāye saṃtiṣṭhati |

そのつど、すなわち、さような、もろもろの、ひとざまどものことにあらざるべからざりけるおおみことがらどものなるべからんとこそではありますが、これまた、さようなことばとしておわせざるべからざりける御方にと、聞こえおぼえはたしてのちに、また、おほほゆるかたがたというおもいいでぎわそのものが、すなわち、身のうえ一身に於て、かさね留どまりこれなるのであり、これまた、むきがらどもというおもいいでぎわそのものも、また、身のほど自身に於て、かさね留どめこれあるわけであります。すなわち、はらからというおもいいでぎわそのものこそが、これまた、身がら一身に於て、また、かさね留どまりもうすのであります。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guna-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-
kṣetram ||7||

かくにとこそ、もろもろの、かたちづきそのことどもによりては、みことのりがよつぎたる方よ、すなわち、もろもろの、おぼえはせられてあるくにはらがさがむきみなりけらしいくさだてりたち自身によりてでも、これまた、整のわれてあるところとてはまかりあらねばならなかつたばかりにもあるところが、さようなおほほせるかたというまほろぼのことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりません。」

<七>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena
kāraṇena sa tathāgato Smitāyur
nāmocyste |

「さようなことがらをば、また、何ごとにと、えとどけ観えたまわさるや。みたましろがあとめたる方よ。すなわち、何ごととしてはおろうはずの、たて成しによりてか、これまた、さようなすべらみことのことにあそばれざるべからざりける御方も、また、ことほぎのとりはからわされずにおるわざごと、すなわち、うきなそのことにと、これまた、ことわかれおかさるのでありましようや。

tasya khalu punaḥ śāri-putra tathāg=
atasya teṣāṃ ca manuṣyāṇāṃ aparimitam
āyuh pramaṇam | tena kāraṇena sa
tathāgato Śmitāyur nāmocyate |

ところが、かたや、さような御方ご一身のなるべきはずとはおわしまさねばならぬ
ところにもおかれんばかりのではありませんが、みことのりがわがこたる方よ、また、
すめらぎご自身、すなわち、さような、もろもろの、ひとめきどもとしておらざる
べからざりけるおおみものごとどものならまほしともつこうまつろうばかりとてある
であろうところのではありませんけれども、これまた、料りわたらずにはいるきわの、
ことぶきそのことも、また、ほど決まりそのことのことにあつたはずでなければなり
ませぬ。すなわち、さようなたて成りとしておらざるべからざりけることがらにより
て、これまた、さようなすめらみことのことにあられざるべからざりける御方が、ま
た、よわいがさしはかられずにあるわざごとそのこと、すなわち、いみなそのこと
と、ことわけられおかれるのであります。

tasya ca śāri-putra tathāgatasya
daśa kalpā anuttarāṃ samyak-saṃbodhim
abhisambuddhasya ||8||

それはともかく、みたましろがよつぎたる方よ、これまた、すべらきご一身のなら
まほしとはあらねばならぬばかりにもあろうところの、また、十どもが、すなわち、
もろもろの、敢えしろたち自身としてでこそはあるが、これまた、やんごとなかり
けりともおつたばかりとはいるきわの、まめやかきみこころゆきでそのものに相いて
も、また、これ、おおみこころばえあそばせておわせる御方のなりけりとまかりあつ
たばかりにあらうはずでなければなりませんまい。」

<八>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena
kāraṇena sa tathāgato Śmitābho
nāmocyate |

それはともかく、これまた、舍利が嫡子たる方よ、また、如来ご一身のなりしはずとはあろうところにもありましようばかりの、すなわち、称量せられずにすむとはおらんきわにもいるではあろうばかりの、これまた、声聞客らという公衆自身も、また、諸々の、およそ、自らの、極妙に起作なるにたるべききわにとはおるであろう、称量に取り、上称するのが治浄なりているわけでもなかりけむおおみものごとものたるべけん、すなわち、諸々の、阿羅漢がたご一身らのならまほしとはつこうまつらうばかりとてあらんはずでもなければありませぬ。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalankṛtaṃ tad buddha-
kṣetram || 9 ||

是の如く、諸々の、型色どもそのことによりてでは、舍利が嫡子たる方よ、これまた、諸々の、佛陀らという本土が功德なりけらし嚴浄智たち一身らによりても、また、文飾せられておるきわとはまかりおらねばならなかつたほどにともいるのが、さような国土が覺了されてある仁事としておらざるべからざりけることがらになければありませぬ。」

<九>

punar aparam śāri-putra ye amitāyusā
tathāgatasya buddha-kṣetre sattvā
upapannāḥ śuddhā bodhi-sattvā avini-
vartanīyā eka-jāti-pratibaddhās teṣāṃ
śāri-putra bodhi-sattvānāṃ na su-karam
pramāṇam ākhyātum anyatrāprameyāsaṃ-
khyeyā iti saṃkhyāṃ gacchanti |

「ところが、更に、舍利が孝子たる方よ、諸々の、およそ、康寿の了度せられずにおる仁事、すなわち、府君のなりとてあるべき、佛陀という本土に於て、有情らのことにあらざるべからざりけむ者たちが、これまた、容迎せられてはあるにもなければありませぬ。

浄治せられてはあそばれるところの、諸々の、菩提が剛決たりけらしともおかせん御方がたは、これ、退離せられざるを要すべからんともおわしますが、また、諸々の、

たるべききわにとはおるであろう、見あきらめに取り、なのりいでるのがいみ済みで
いるわけでもなかりけむおおみものごとどものたるべけんと、すなわち、もろもろの、
みそなわさるかたがたご一身らのならまほしとはつこうまつろうばかりとてあらんは
ずでもなければありませぬ。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-
kṣetram ||9||

かくとて、もろもろの、いろめづきどもそのことによりてでは、みたましろがあと
めたる方よ、これまた、もろもろの、おほはゆるかたがたというまほろぼがさがむき
すじなりけらしいくさだたりたち自身によりてでも、また、整のわされておるきわと
はまかりおらねばならなかつたほどにともいるのが、さようなくにはらがおほえはや
されてあるわざごととしておらざるべからざりけることがらになければなりませぬ。」

<九>

punar aparaṃ śāri-putra ye amitāyusā
tathāgatasya buddha-kṣetre sattvā
upapannāḥ śuddhā bodhi-sattvā avini-
vartanīyā eka-jāti-pratibaddhās teṣāṃ
śāri-putra bodhi-sattvānāṃ na su-karaṃ
pramāṇam ākhyātum anyatrāprameyāsaṃ-
khyeyā iti saṃkhyāṃ gacchanti |

「ところが、さらに、みことのりがわがこたる方よ、もろもろの、およそ、ことほぎ
のとりはからわされずにおるわざごと、すなわち、すべらみことのなりとてあるべき、
おほはせるかたというまほろぼに於て、まこと（ミコト）らのことにあらざるべから
ざりけむ者たちが、これまた、まかり宥されてはあるにもなければありませぬ。

とり済まされてはあそばれるところの、もろもろの、たまのおがみことたりけらし
ともおかせん御方がたは、これ、たてゆるまれざるべからんともおわしますが、また、
もろもろの、一つながらが生まれつきなりけらし者らのあて契ないてはいるきわたる
べしともあらせらりょうばかりの、すなわち、もろもろの、さよふな、自らの、これ

また、みたましろがよつぎなりける御方よ、ことだまというまこと（ミコト）たちの
たりけれとはおるべかりしも、また、高らかく、これ、たち成るにたるべくはおろう
ばかりともいまいしょうきわの、ほど決めに相いて、なのりあげたまわさるのがほかざ
まにと、これ、おかせるわけではない御方がたが、『測りあてられずにするものご
とどもによるとも称なえあげられずにはすむほどなりともかたじけのうせんほどとて
あそばす。』とこそ、すなわち、称なえあがりぎわそのものに取り、通しゆかせせ
たまわすわけであります。

tatra khalu punaḥ śāri-putra buddha-
kṣetre sattvaiḥ praṇidhānaṃ kartavy-
am | tat kasmād dhetoḥ yatra hi
nāma tathā rūpaiḥ sat-puruṣaiḥ saha
samavadhānaṃ bhavati |

ところで、かたや、そのつど、みことのりがあとめたる方よ、くにはらのおぼせ
はえているわぎごとそのことに於ては、これまた、もろもろの、みことたちによりて
も、また、ねぎとおりそのことが、すなわち、たち成られねばならぬにはありますが、
さようなことがらそのことが、これまた、誰としてもおらんきわの、あたえりすじの
方からあずかりあるわけでありましようや。すべからく、うきなそのことは、なおし、
もろもろの、かたちづけそのことどもによりてこそまかりおらんほどにといるわけ
すから、もろもろの、まことしからまほしけるものごとどもというまろうどたち一身
らによりても、また、かたがた、まかり合いそのことが、ながらえまかるわけであり
ます。

nāvara-mātra-keṇa śāri-putra kuśala-
mūlenāmitāyusaḥ tathāgatasya buddha-
kṣetre sattvā upapadyante |

すなわち、かかりみどもがわれ自体たりけらしとはおろうわけでもないままのでは
ありますが、みたましろがわがこなる方よ、これまた、すくよかたりけらし根まわり
そのことによりて、また、ことぶきがさしはかられずにあるわぎごとそのこと、すな
わち、すめらぎご自身のなるべからんとこそ、これまた、おぼほゆるかたがたという

まほろばそのことに於て、また、もろもろの、まこと（ミコト）がたご一身らも、すなわち、これ、たすかり寄らせられますわけであります。

yah kaś cic chāri-putra kula-putro vā
kula-duhitā vā tasya bhagavato Smit=
āyusas tathāgatasya nāma-dheyam śroṣ=
yati śrutvā ca manasi-kariṣyati eka=
rātram vā dvi-rātram vā tri-rātram vā
catū-rātram vā pañca-rātram vā ṣaḍ=
rātram vā sapta-rātram vā vikṣipta=
citto manasi-kariṣyati |

これまた、およそ、誰か、みことのりがよつぎたりける御方よ、あるいは、よがよがあとめなりけれともおかれるか、あるいは、きみがよというたらちねのことにもあるであろうきんだちが、さよふなひるみむちとしておらざるべからざりけるおおみことがら、すなわち、よわいのとりはからわずにいるわざごとそのことのことにはおわしょうともおかれんところの、それ、すめらみことご自身のたらまほしかれとこそ、これまた、いみなによりこみゆだねられざるをえぬところとてはいます御方に相いて、おぼせ聞きありもうすやもしれませぬ。

また、聞きおぼえつかまつりてではありまするけれども、すなわち、おもいいれこれなることでありましょう。あるいは、一夜ごとにも、あるいは、二夜ともでも、これまた、あるいは、三夜ごとにも、あるいは、四夜ともでも、あるいは、五夜ごとにも、あるいは、六夜ともでも、あるいは、七夜ごとにも、また、こころづのりておる者の措きつもりているひと一身として、こころえこれありもうすやはしれませぬ。

yadā sa kula-putro vā kula-duhitā vā
kālam kariṣyati tasya kālam kurvataḥ
so Smitāyus tathāgataḥ śrāvaka-samgha=
parivrto bodhi-sattva-gana-puras-krtah
pura-taḥ sthāsyati |

あらかじめ、さような、あるいは、よすじがわがこなるとてもいますところか、あるいは、よがよというめのとのことでもあったところに、これ、おかざるべからざりける者が、すなわち、めぐりどき自身に取りて、成したてありもうすことでありましようが、さような、ときまわりに相い、成したちつつおらざるべからざりけるおおみものごとのたるべけんには、これまた、さようなことほぎがさしはからわれずにあるわざごととしてあらせざるべからざりける御方のことにもあそばりょうところの、また、すべらきご一身、すなわち、きこえ名どもというはらからどものとりめぐりなりもうしてはおわせる御方こそが、これまた、たましいがみことなりけらしめぐりわりみどもの宛てゆずりこれなりてもあらせる御方として、また、もつつみくらの上から、すなわち、立てなおしあそばせたまうやはしれませぬ。

so Śviparyasta-cittaḥ kālaṃ kariṣyati
ca | sa kālaṃ kṛtvā tasyaivāmitāyusas
tathāgatasya buddha-kṣetre sukhāvaty=
ām loka-dhātāv upapatsyate |

これまた、さようなたてまぎらずにいることがらどもがつのりごころたらざるべからざりける御方も、また、めぐりどき自身に取り、おん成したちなりたまわすことではあろうけれどもであります。すなわち、さような御方ご一身が、これまた、ときまわり自身にと、たち成りはたされましてや、また、さようなことぶきのとりはからわされずにおるわざごととしておわせざるべからざりける御方のことにはわたらりょうはずともあられましようところの、すべらみことご一身のならまほしけれとこそ、くにはらがおぼえはせられてあるわざごとそのこと、すなわち、やすらいというあえまわりぎわそのものとしてはおったはずの、これまた、ちりのよというきご自身に於て、また、えまかり容れあそばすやもしれませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra idam artha-
vaśaṃ sampāśyamāna eva vadāmi |

はたせるかな、みたましろがよつぎたる方よ、すなわち、かようなみずあげみどもがいたしがけみならざるべからざりけらしおおみものごとの相いてこそ、これまた、かえし重さなられながらではあるにもほかなりませぬが、また、そぞのいこれもうし

あげんのみであります。

sat-kr̥tya kula-putreṇa vā kula-duhitrā
vā tatra buddha-kṣetre citta-praṇidh-
ānam kartavyam ||10||

すなわち、なおりとげこれなりてのち、あるいは、きみがよというあとめ一身によりても、あるいは、よすじというたらちねそのものによりてでも、そのつど、おぼほせるかたというくにはらそのことに於てでは、これまた、ねぎとおしがこころづもられてあるわざごとそのことが、また、成したてられねばならぬところとてあろうばかりにもなければありませぬ。」

<十>

tad yayhāpi nāma śāri-putra aham
etarhi tām parikīrtayāmi

「しかり、のみならず、みことのりがわがこたる方よ、私自身は、むしろ、さような御そのものに取りて、宛てぶりこれもうさずもなるまいことにはなります。

evam eva śāri-putra pūrvasyām diśi
akṣobhyo nāma tathāgato meru-dhvajo
nāma tathāgato mahā-merur nāma tath-
āgato meru-prabhāso nāma tathāgato
mañju-dhvajo nāma tathāgataḥ |

すなわち、かくにともつかまつらんほどにとおりもうすきわにはほかなりませぬが、みたましろがよつぎなる方よ、これまた、さきがけたりけりともおったばかりにはいるきわの、むかえどそのものに於てでも、また、ほだされるなきかたご一身、すなわち、うきなそのことのことにはいまさねばならぬところが、これまた、すめらぎご自身におわしますばかりでなければなりませぬ。

また、ふしがはらやまというはたじるし一身、すなわち、いみなそのこととしてもいませるのが、これまた、すめらみことご自身にはあられますところでもあり、また、大きなふしがはらやま一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますところが、これまた、すべらきご自身にあそばれますところでもあり、また、ふしが

はらやま というさしのぞみみ一身、すなわち、いみなそのこととしてはいませるのが、これまた、すべらみことご自身におわしますところでもあり、また、みやびけらまほしあやじるし一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますところが、これまた、すめらぎご自身にあられるわけであります。

evam pramukhāḥ śāri-putra pūrvasyām
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā
bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā
nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、とおり面てならまほしけれともあそばれる御方がたが、また、みことのりがあとめたる方よ、ままえなりけれとはあろう場、すなわち、まむきどそのものに於ても、これまた、きつゆきがわ という浴いながれぎわおよびながれ砂がたといどたりしとこそわたらしょうばかりの、また、もろもろの、おぼせはやらされおかせておわせる御方がた、すなわち、もろもろの、ひるめむちがたとしてあらせたわけであります、これまた、隙のままなりけることがらどもが暇たりしままなるとはあろうはずの、もろもろの、おぼはゆるかたがたというまほろぼそのことどもをして、また、あじわどもというこちむけそのことによりて、すなわち、合いなすましめたまうや、これまた、ひきつぎかさねそのことに相い、また、おん成したてありたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||11||

すなわち、互たしがかりならんとあそばせるに、これまた、おんみらこそがおわしまさねばならぬところでもあります、また、かような思いつめられずすむさがむけみどもによる宛てぶりのことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもどもがおぼえはやされてあるさしかかえり一身に取りては、これまた、いみなそのこととしてでも、また、むけがらというたまふりみ自身に相いてまかりあつたばかりとてなければならぬはずであります。」

<十一>

evam dakṣiṇasyām diśi candra-sūrya-
pradīpo nāma tathāgato yaśaḥ-prabho
nāma tathāgato mahārciḥ-skandho nāma
tathāgato meru-pradīpo nāma tathāgato
Snanta-vīryo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、かくにとかたじけのうせんほどにはおらねばなりませぬが、これまた、さかしらけりともおったばかりにはいるきわの、むかいどそのものに於ても、また、月かげがこもれ陽なるかがり火一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますところが、これまた、すめらみことご自身にあられたまうはずでなければなりませぬ。

また、あやだちというあかつき一身、すなわち、いみなそのこととしてもいますはずであるのが、これまた、すべらきご自身にはあそばれますところでもあり、また、大けたりめるはずみばせというむくみ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すべらみことご自身におわしますところでもあり、また、ふしがはらやまというかがり火一身、すなわち、いみなそのこととしてはいますはずであるのが、これまた、すめらぎご自身にあられますところでもあり、また、きわみ無けるいさみごころ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますところも、これまた、すめらみことご自身にはあそばれるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra dakṣiṇasyām
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā
bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā
nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、とおし面てかたご一身らが、また、みたましろがわがなる方よ、まともたらまほしかれとはおろう廷、すなわち、むかえどそのものに於ても、これまた、きつゆきがわというながれ沿いぎわ および砂はまがたとえでなるべきとこそわたらりょうばかりの、また、もろもろの、おぼはせるかたがたご自身、すなわち、もろもろの、ひるみむちがたとしておわせるであろうわけですが、これまた、隙のままたりけることがらどもが暇なりきままたるにはおろうはずの、もろもろの、くにはらのおぼせはえているわざごとどもそのことをして、また、あじめとい

うこちむきそのことによりて、すなわち、合いなじませたまひ、これまた、ひき
つぎおくりそのことに取りて、また、おん成したちなりたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-
parikīrtanaṃ sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||12||

すなわち、かけ互たしあらんとおかせると、これまた、おんみらこそがあられまさ
ねばならぬところでもあります。また、かような思いつもられずすむさかむけ
すじどもによるふるい応たりのことにあらざるべからざりけらしことながら、すなわ
ち、誰もかれもがおぼほゆるかたなりけらしさしつかねり一身に相いては、これまた、
いみなそのこととしても、また、ことむけどもというたまわりすじ自身に取りてまか
りあるばかりとてなければなりません。』 <十二>

evam paścimāyāṃ diśi amitāyur nāma
tathāgato Śmita-skandho nāma tathāgato
Śmita-dhvajo nāma tathāgato mahā-prabho
nāma tathāgato mahā-ratna-keṭur nāma
tathāgataḥ śuddha-raśmi-prabho nāma
tathāgataḥ |

「すなわち、かくにとかたじけのうせんほどにはおらねばなりません。これまた、
まのちたらまほしかれともおろうきわにはおらんばかりの、まむきどそのものに於て
でも、また、よわいがさしはかられずにあるわざごとそのこと、すなわち、うきな
そのことのことによましようはずではあるところが、これまた、すべらきご一身に
あそばすのでなければなりません。

また、むくろのとりはからわずにいるひと自身、すなわち、いみなそのこととして
もいませるはずであるのが、これまた、すべらみことご一身にはおわすのでもあり、
また、はたじるしがさしはからわれずにあるひと自身、すなわち、うきなそのこと
のことにはいますはずであるところが、これまた、すめらぎご一身にあらせたまうの
でもあり、また、大きなおおみことがらというあけほの自身、すなわち、いみなその
こととしてはいませるはずであるのが、これまた、すめらみことご一身にあそばすの

でもあり、また、大いたる者らによるほどこりというぬさぎぬ自身、すなわち、うきなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すべらきご一身におわすのでもあり、また、いみ清まされておるものごとどもがかかやきなるあかつき自身、すなわち、いみなそのこととしてはいませるのも、これまた、すべらみことご一身にあらせるはずではあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra paścimāyā
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā
bhagavantaḥ kha-ka-kha-kāni buddha-
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā
nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、口はばたらまほしかれともあそばせる御方がたが、また、みことのりがよつぎなる方よ、あとかたたりけれとはおろう砌、すなわち、むかいどそのものに於ても、これまた、きつゆきがわ という浴いながれぎわおよびながれ砂がたといどなりきとこそわたらりようばかりの、また、もろもろの、おぼえはせられおかれておわさる御方がた、すなわち、もろもろの、ひるめむちがたのことにあられたわけでありましたが、これまた、隙のままたりけることがらどもが暇なりきままたるにとはおろうはずの、もろもろの、おぼほせるかたというまほろぼそのことどもをして、また、あじでどもというこちむけそのことによりて、すなわち、合いなずましめたもうてのち、これまた、ひきつぎかさねそのことに相い、また、おん成したてありたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||13||

すなわち、互たしがかりならんとおかせるに、これまた、おんみらとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような思いつめられずすむさがむきみどもによる称げふりのことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかものおぼせはやらされておるさしかかえり自身に取りては、これまた、うきなそのこととしてでも、また、わけがらというたまふりみ一身に相いてまかりおらん

evam uttarāyām diśi mahārciḥ-skandho
nāma tathāgato vaiśvānara-nirghoṣo
nāma tathāgato dundubhi-svara-nirghoṣo
nāma tathāgato duṣpradharṣo nāma
tathāgataḥ ditya-sambhavo nāma tathā-
gato jale niprabho nāma tathāgataḥ
prabhākaro nāma tathāgataḥ |

「すなわち、かくにとかたじけのうせんほどにはおらねばなりませぬが、これまた、すぎわいならまほしけれともあろうところにはあらんばかりの、むかえどそのものに於てでも、また、大けたりめるいさみばせというむくみ自身、すなわち、いみなそのことのことにはいまいしよはずではあるところが、これまた、すめらぎご一身におわすのでなければなりませぬ。

また、ひとそれぞれなんめるひびきわたりみ自身、すなわち、うきなそのこととしていませるはずであるのが、これまた、すめらみことご一身にはあらせたまうのでもあり、また、つづみ打ちまえが音ざしみたるひびきなごりすじ自身、すなわち、いみなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すべらきご一身にあそばすのでもあり、また、低やからまほし勝ちいくさ自身、すなわち、うきなそのこととしていませるはずであるのが、これまた、すべらみことご一身におわすのでもあり、また、その日かぎりたりめる稟けまえ自身、すなわち、いみなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すめらぎご一身にあらせたまうのでもあり、また、ふたつとも水かげそのこととしてはこれおらんはずともいるきわの、ひかりだちみ自身、すなわち、うきなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すめらみことご一身にあそばすのでもあり、また、あけぼのというものしろ自身、すなわち、いみなそのこととしていませるのも、これまた、すべらきご一身にはおわせるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra uttarāyām
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā

bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-
kṣetrāṇi jihvendriyena samchādayitvā
nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、口のはがたご自身が、また、みたましろがあとめなる方よ、よすぎたらまほしかれとはおろう場、すなわち、まむきどそのものに於ても、これまた、きつゆきがわ というながれ沿いぎわおよび砂はまがたとえでなるべきとこそわたらりょうばかりの、また、もろもろの、おぼはゆるかたがたご一身ら、すなわち、もろもろの、ひるみむちがたのことにあられるであろうわけですが、これまた、隙のままたりけることがらどもが暇なりきままたるにはおろうはずの、もろもろの、くにはらがおぼえはやされてあるわざごとそのことどもをして、また、あじわというこちむきそのことによりて、すなわち、合いなじましめたまうや、これまた、ひきつぎおくりそのことに取り、また、おん成したちなりたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||14||

すなわち、かけ互たしあらんとおさせるに、これまた、おんみらとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような思いつもられずすむさがむきすじどもによるふるい揚げのことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、誰もかれもらがおぼはせるかたなりけらしさしつかねり自身に相いては、これまた、うきなそのこととしてでも、また、ことわきどもというたまわりすじ一身に取りてまかりおらんほどにとなければならぬはずであります。」

<十四>

evam adhastāyāṃ diśi siṃho nāma
tathāgato yaśo nāma tathāgato yaśaḥ-
prabhāso nāma tathāgato dharmo nāma
tathāgato dharma-dharmo nāma tathāgato
dharma-dhvajo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、かくにとかたじけのうせんほどにはおらねばなりませぬが、これまた、下がけたりけりともおったばかりにはいるきわの、むかいどそのものに於ても、ま

た、いかつ獅子ごち自身、すなわち、いみなそのことのことにはいましたはずではあるところが、これまた、すべらみことご一身におわすのでなければなりません。

また、あやだてそのこと、すなわち、うきなそのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、すめらぎご自身にはあられますところでもあり、また、あやがけというさしながめすじ一身、すなわち、いみなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すめらみことご自身にあそばれますところでもあり、また、ことわりみたま一身、すなわち、うきなそのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、すべらきご自身におわしますところでもあり、また、わりがらのこれうけ負うにたりませるおんきみご一身、すなわち、いみなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すべらみことご自身にあられたまうところでもあり、また、ことむきというあやじるし一身、すなわち、うきなそのこととしてはいませるのも、これまた、すめらぎご自身にはあそばれるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra adhastāyām
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā
bhagavantaḥ kha-kha-kāni buddha-
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā
nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、とおり面てならまほしけりとはおわさる御方がたも、また、みことのりがわがこたる方よ、ましもなりけれとはあろう廷、すなわち、むかえどそのものに於ても、これまた、きつゆきがわ という沿いながれぎわおよびながれ砂がたといどたりしとこそわたらしょうばかりの、また、もろもろの、おほせはえたもうてあらせる御方がた、すなわち、もろもろの、ひるめむちがたのことにあそばれたはずであるわけですが、これまた、隙のままなりけることがらどもが暇たりしままなるとではあろうはずの、もろもろの、おほほゆるかたがたというまほろぼそのことどもをして、また、あじめどもというこちむけそのことによりて、すなわち、合いなずましめたまい、これまた、ひきつぎかさねそのことに相い、また、おん成したてありたまわすのであります。

pratīyatha yūyam idam acintya-guṇa-

parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||15||

すなわち、互たしがかりならんとおかせるに、これまた、おんみらとしておわせねばならぬきわにもあるはずですが、また、かような思いつめられずすむさがむけみどもによる宛てぶりのことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもがおぼえはせられてあるさしかかえり一身に取りては、これまた、いみなそのこととしてでも、また、むきがらというたまふりみ自身に相いてまかりあるばかりとてなければならぬはずであります。」

<十五>

evam upariṣṭhāyāṃ diśi brahma-ghoṣo
nāma tathāgato nakṣatra-rājo nāma
tathāgata indra-ketu-dhvaja-rājo nāma
tathāgato gandhottamo nāma tathāgato
gandha-prabhāso nāma tathāgato mah-
ārci-skandho nāma tathāgato ratna-
kusuma-sampuṣpita-gātro nāma tath-
āgataḥ sālendra-rājo nāma tathāgato
ratnotpala-śrīr nāma tathāgataḥ sarv-
ārtha-darśī nāma tathāgataḥ su-meru-
kalpo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、かくにとかたじけのうせんほどにはおらねばなりませぬが、これまた、上ざしたるべしともおらんきわにはいまいしょうばかりの、まむきどそのものに於てでも、また、こころもとという鳴りひびきまえ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますところが、これまた、すめらみことご自身にあられたまうはずでなければなりませぬ。

また、あまつわたらいというきみがみち一身、すなわち、いみなそのこととしていませるはずであるのが、これまた、すべらきご自身にはあそばれますところでもあり、また、こころおぼせというみかえりふだがはたじるしなるおおきみ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいますはずであるところが、これまた、すべらみことご自身におわしますところでもあり、また、かおりというとりゆるやぎみたま一身、

すなわち、いみなそのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、すめらぎご自身にあられたまうところでもあり、また、においというさしのぞみすじ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいませるはずであるところが、これまた、すべらみことご自身にあそばれますところでもあり、また、(大きな) ころだちというむくろ一身、すなわち、いみなそのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、すべらきご自身におわしますところでもあり、また、ほどこしどもというはなやかさが映きはびこらしめられてある身たけ一身、すなわち、うきなそのことのことにはいませるはずであるところが、これまた、すべらみことご自身にあられたまうところでもあり、また、いましめ身がおぼえごころたるきみがみち一身、すなわち、いみなそのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、すめらぎご自身にあそばれますところでもあり、また、ほどこりどもがぬるみばみなるかね承かりぎわそのもの、すなわち、うきなそのことのことにはいませるはずであるところが、これまた、すべらみことご一身におわせるのでもあり、また、誰もかれもというみずひきすじをして見あたらしめうるにたりませるおんきみご自身、すなわち、いみなそのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、すべらきご一身にあらせたまうのでもあり、また、たかふしはらやまという宛てしる自身、すなわち、うきなそのことのことにはいませるはずであるところが、これまた、すべらみことご一身にはあそばせるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra upariṣṭhāy-
 ām diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā
 bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-
 kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā
 nirveṭhanam kurvanti |

かくとて、もろもろの、とおし面てがたご自身が、また、みたましろがよつぎたる方よ、まかみなるべけれとはあろう砌、すなわち、むかいどそのものに於てでも、これまた、きつゆきがわ というながれ沿いぎわ および砂はまが たとえてたるべしとこそわたらしょうばかりの、また、もろもろの、おぼほせるかたがたご一身らとしてこれおわせんきわの、すなわち、もろもろの、ひるみむちがたのことにあられるであらうわけですが、これまた、隙のままなりけることがらどもが暇たりしままなるとはあろうはずの、もろもろの、くにはらのおぼせはやらされておるわざごとども

そのことをして、また、あじでというこちむきそのことによりて、すなわち、合いなじましめあらせられてのち、これまた、ひきつぎおくりそのことに取りて、また、おん成したちなりたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ
nāma dharma-paryāyam ||16||

すなわち、かけ互たしあらんとおかせるに、これまた、おんみらとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような思いつもられずすむさがむけすじどもによるふるい応たりのことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、なにもかもがおほはゆるかたたりけらしさしつかね自身に相いては、これまた、いみなそのこととしても、また、むけがらどもというたまわりすじ一身に取りてまかりおらんほどにとなければなりませんまい。」

<十六>

tat kiṃ manyase śāri-putra kena
kāraṇenāyaṃ dharma-paryāyaḥ sarva-
buddha-parigraho nāmocyate

「さようなことがらが、すなわち、何ごとにと、えあずかり観えたまわれるや。みことのりがあとめなる方よ。これまた、何ごとのことにはあろうところの、たて成しによりてか、また、かようなことむけがたまふりみたらざるべからざりけらし者、すなわち、誰もかれもらがおほえはやされてあるさしかかえり自身が、これまた、うきなそのことにと、ことわかれるのでありましようや。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā
kula-duhitāro vāsyā dharma-paryāyasya
nāma-dheyam śroṣyanti

およそ、誰でも、みたましろかわがこなりける御方よ、あるいは、よがよがよつぎたりけれともおかせるか、あるいは、きみがよというめのととしてもおるであろうきんだちがたが、また、かようなわけがらというたまわりすじのことにおわさざる

べからざりけらし御方こそなるべからんとて、すなわち、いみなによりこみゆだねられざるをえぬおおみものごとくに相いてこそ、これまた、おぼせ聞こえなりませることでありましょう。

teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ nāma-
dheyam dhārayiṣyanti sarve te buddha-
parigrhītā bhaviṣyanti avinivartanīy-
āś ca bhaviṣyanti anuttarāyāṃ samyak-
saṃbodhau |

それはともかく、また、もろもろの、おぼはせるかたがた、すなわち、もろもろの、ひるめむちがたのたらまほしかれと、これまた、うきなによりゆだねこめられざるをえぬおおみことがらをして、うけ負わしめこれならせるやはしれぬにもありましょうが、また、もろもろの、なにかもどもとしてこそ、すなわち、さような、もろもろの、つかね上がりておる者のおぼせはえているひとらのことにわたられざるべからざりける御方がたとしてこそ、おんながえ立ちなりたまわすことではありましょう。これまた、もろもろの、たちゆるめられざるべからんともおかれる御方がたのこととてあられたまうわけではあるけれどもであります。また、おんながらえまかりありたまわすやはしれぬにもありますが、これ、よがらざりけらしとてあらん場、すなわち、まめやけしみこころよりどそのものに於てこそはまかりわたらせたまうきわにともなければありませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra śrad[dh]ādhvam
pratiyatha mā kāṅkṣayatha mama ca
teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ |

はたせるかな、みことのりがあとめたる方よ、まことしみぎわというゆきがかりまえ一身に取りて、互たりがかりなれこそはたまい、私自身をしても、これまた、仰ぎねがわしめたまわすではないか。また、私一身のならまほしけれともかたじけのうせんところとてあそばれるはずではありましょうけれども、それはともかく、もろもろの、おぼほゆるかたがた、すなわち、もろもろの、ひるみむちがたのたるべけれとこれまかりおかせんばかりともなければありますまい。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā
kula-duhitaro vā tasya bhagavato
Smitāyusas tathāgatasya buddha-kṣetre
citta-praṇidhānam kariṣyanti kṛtaṃ vā
kurvanti vā sarve te Śvinivartanīyā
bhaviṣyanty anuttarāyāṃ samyak-saṃ-
bodhau |

これまた、およそ、誰か、みたましろがわがこなりける御方よ、あるいは、よすじがよつぎたりけれともおさせるか、あるいは、よがよというたらちねとしてもおるであらうきんだちがたが、また、さようなひるめむちのことにおわさざるべからざりける御方としてはあらせられるきわにともしましようばかりの、すなわち、ことほぎがとりはからわされずにおるわざごとのことにはあられますところの、これまた、すめらぎこそそのなるべからんとて、また、くにはらがおぼえはせられてあるわざごとそのことに於て、すなわち、つもりごころによるねぎとおりそのことに相いて、成したてこれありませることでもありましよう。

これまた、あるいは、成したちているおおみものごとに取りてあそばせるきわにともしませねばならぬか、あるいは、おん成したちこれなりもおわさんに、また、もろもろの、誰もかれもたち、すなわち、さような、もろもろの、たてのがられざるべからんとあらざるべからざりける御方がたとしてあそばせるかでなければなりませんまい。これまた、おんながらえ立ちこれたまわさるやはしれぬにもありますが、また、やんごとなからまほしけれとはあらねばならぬところの、すなわち、まめやかきみこころやらせでそのものにこそ於てかたじけのうわたられんばかりとておわしましようところなければなりませんまいぞ。

tatra ca buddha-kṣetra upapatsyanti
upapannā vā upapadyanti vā |

これまた、そのつどとてもまかりおかせられましようばかりではありまするけれども、また、おぼほせるかたというまほろばそのことに於て、すなわち、えたすけ寄せこれたまうことでありましようが、これまた、あるいは、もろもろの、たすけ持たれおかれてもあられる御方がたのこととはあそばれるところともあらねばならぬか、

あるいは、また、え寄りたすけれこそたまわすかでなければなりませんまい。

tasmāt tarhi śāri-putra śrāddhaiḥ
kula-putraiḥ kula-duhitṛbhiś ca tatra
buddha-kṣetre citta-praṇidhir utpāday=
itavyaḥ ||17||

はたせるかな、みことのりがあとめなる方よ、なさけあつくもこれつこうまつらん
ほどにいまいしょうきわの、すなわち、もろもろの、きみがよというわがこたち自身に
よりてでは、これまた、もろもろの、よすじというめのとそのものどもによりても
まかりおらねばならぬばかりにとこそではありまするけれども、また、そのつど、す
なわち、くにはらのおぼせはやらされておるわざごとそのことに於てでは、これまた、
ねぎまかりぎわのこころもたれておるわざものそのものも、また、あらたかしめられ
るべけんとおるのでなければなりませんぬ。」 <十七>

tad yathāpi nāma śāri-putra aham
etarhi teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatām
evam acintya-guṇān parikīrtayāmi

「しかり、のみならず、みたましろがよつぎたる方よ、私一身としては、むしろ、
さようなことがらどもそのことのことにもおわしますところの、もろもろの、おぼは
ゆるかたがた、すなわち、もろもろの、ひるみむちがたのならまほしけれとこそ、こ
れまた、かくにと、もろもろの、思いつもられずすむさがむきみたち自身に相いて
ではありまするが、また、称げふりたてまつらずもなるまいことにはなりません。

evam eva śāri-putra mamāpi te buddhā
bhagavanta evam acintya-guṇān pari=
kīrtayanti |

すなわち、かくつかまつらんほどにともおりもうさんきわにはほかなりませぬが、
みことのりがあとめなる方よ、これまた、私一身のならまほしともまかりあられたま
わしょうばかりとてわたられんところではあっても、また、さような、もろもろの、

おぼえはやされあそばれておわさる方がたとしてあらせざるべからざりける御方がた、すなわち、もろもろの、ひるめむちがたは、これまた、かくにと、また、もろもろの、思いつめられずすむさがむきすじたちに取り、すなわち、宛てぶりあそばせおかすわけであります。

su-duṣ-karam bhagavatā śākya-muninā
śākyaādhirājena kṛtam |

これまた、高らけらまほし者らの低やけく成したてるにたるきわにともおらんものごとが、また、ひるみむち、すなわち、あえかげがしじまなりけらしとはおわさん御方のことにもあらねばならぬところにはおかれんばかりの、これまた、さしかげというおんとりすべのきみによりても、また、たち成られてあるところとてなければなりません。

sahāyāṃ loka-dhātāv anuttarāṃ samyak-
saṃbodhim abhisambudhya sarva-loka-
vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ kalpa-
kaṣāye sattva-kaṣāye drṣṭi-kaṣāya
āyuṣ-kaṣāye kleśa-kaṣāye ||18||

すなわち、うけしのびぎわそのものとしてはおったはずの、これまた、よのちりというあやまご自身に於て、また、よがらざらまほしけれともいる延、すなわち、まめやけしみころよせりどそのものに相い、おおみころばえこれなりたまわすや、これまた、なにかもといううきよどものかけ互たらるべけんとはいませるきわの、ことわきみたまご一身が、また、これ、たち向きゆかしめられておられるところにあるわけであります。

すなわち、敢えしるどもというしぶりそのことに於てでもかたじけのうたまわれんばかりとはいませねばならなかつたところでもあるが、これまた、まこと(ミコト)どもというしぶり自身に於てではあそばれますところでもあり、また、見つまりぎわというにがりそのこと、すなわち、ことぶきどもというにがみ一身に於ておわしたのでなければならぬが、これまた、つのりうらみというしぶりそのことに於てではまかりあられますばかりとてもおかれましようぞ。」

<十八>

tan mamāpi śāri-putra parama-duṣ-karam
yan mayā sahāyām loka-dhātāv anuttarām
samyak-sambodhim abhisambudhya sarva-
loka-vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ
sattva-kaṣāye drṣṭi-kaṣāye kleśa-kaṣ
āya āyuṣ-kaṣāye kalpa-kaṣāye ||19||

「また、さようなことがらそのことが、すなわち、私自身のなりけりとはかたじけのうせんばかりとてもあったところではありましても、これまた、みたましろがわがこたる方よ、きわみつきけらまほし者らの低やかにたち成すにたるきわにとはおらねばなりませぬのも、また、およそ私によりてこれつかまつらざるべからざりけむものごとになければなりませんまい。

すなわち、とりしのぎぎわそのものことではあるところの、これまた、ちりのよというすじ一身に於て、また、やんごとなけりともおらんきわの、すなわち、まめやかきみこころゆきでそのものにと、おおみこころばやりはたしましてこそ、これまた、誰もかれもらというよのちりがとり互たたるべからんとはいましようところの、ことわりみたま自身も、また、さし向きゆかしめられてはあるところでもなければありませぬ。

すなわち、みことというしぶみ一身に於てこれつかまつらんほどとはおらねばならぬきわにともいるが、これまた、見つめりぎわどもというにがりそのことに於てではあらんところでもあり、また、こもりうらみどもというにかみ自身、すなわち、よわいというしぶりそのことに於ておるのではありますが、これまた、宛てしろというしぶみ一身に於てまかりおりもうさんほどにとこそなければなりませんまいぞ。」

<十九>

idam avocad bhagavān āttamanāḥ āyuṣmān
[s]āri-putras te ca bhikṣavas te ca bodhi-
sattvāḥ sa-deva-mānuṣāsura-gandharvaś ca
loko bhagavato bhāṣitam abhyanandan ||20||

かようなことがらそのことに取りて、また、ことあがり、これ、あそばせておわしたのも、ひるめむちにはあられました。

さとけらしくもこれまかりいませるばかりの、ことほげるかた、すなわち、みことのり
というおんあためご自身が。それはともかく、これまた、もろもろの、こころする者たち
一身らも、また。それはともかく、もろもろの、ひとだまというまこと（ミコト）たち自
身こそが、すなわち、なかばこころねなりけらしひとのみちどもというますらがよみつし
らべたるべしともおらんきわのではあるけれども、これまた、うきよとして、また、こ
れ、ひるみむちの方からかたじけのういたさんばかりとて、すなわち、のたうびなりたも
うてあそばせる御方に相い、これまた、おんまつらいもうしあげましたことではあった。

<二十>

sukhāvātī vyūho nāma
mahā-yāna-sūtram ||

また、やすらぎというまわしあえぎわそのもの

のことでもあるところの、

いくさだてり一身、すなわち、

いみなそのこと

としてはおらねばならぬのも、これまた、

大いからまほしけるものごとどもによるへめぐり

(大けなんめるへめぐり)

というみちぶみそのことであるところでなければならぬ。

以上、南都小塔院住職河村俊英訳、梵本阿弥陀經、和語訳編、終。